

第 71 話〈国東半島〉の要約と参考資料

第 71 話〈国東半島〉の要約

佐藤百熊さんの家族は、国東半島の漁港深江で短期間のちの洗濯をしたあと、百熊さんはぜん息、妻のシマノさんは肝臓と膀胱、長男勝美さんは肝臓がんで亡くなり、長女ミサエさんは土呂久訴訟の原告になって、病気が「鉾山から排出するヒ素に起因」と認めさせました。

第 71 話〈国東半島〉の参考資料

7 1 - 1 佐藤百熊さんの家族

佐藤喜右衛門の戸籍（大字岩戸 3396 番地）より

弟 百熊 明治 18 年 4 月 23 日生 利喜治・モヨ次男

佐藤シマノと婚姻届出明治 45 年 1 月 17 日受付

佐藤ヨ子ト養子縁組届出昭和 5 年 2 月 5 日受付除籍

弟妻 シマノ 明治 27 年 1 月 10 日生

甥 勝美 明治 45 年 5 月 20 日生 百熊・シマノ長男

姪 ミサエ 大正 6 年 5 月 25 日生 百熊・シマノ長女

7 1 - 2 佐藤百熊さん

明治 18 年 4 月 23 日 利喜治の二男として生まれる

昭和 21 年 9 月 8 日死亡

佐藤晴さん（百熊の妹スギの娘）の話（1976 年ごろ聴取）

（百熊さんは）咳をして、ぜん息みたいじゃった。昭和 21 年、食うものもなく、主人（百熊の長男勝美）はシベリアにいておらん間に死なしたんです。ほとんどぜん息やったです。延岡におったけど、終戦のときに、小林仁市郎の里に帰って、2 か月くらいおって、古い小屋を借りて、そこで死なせたんです。薬もなく……。

小林仁市郎さん（喜右衛門の妹スギの養子）の話（1976 年ごろ聴取）

背は高かった。人間がよかった。丁寧で、人付き合いのよかった人だ。面のとれた話をしてた。昭和 3 年ごろは、土呂久にいなかった。

佐藤繁熊さんの話（1976 年ごろ聴取）

三番坑の鉾夫だったが、余暇に、二番坑の製品を 10 キロくらいの壺と酸箱に入ったの

を、山道にトロを敷いて、そりで事務所まで運んでいた。

富松丈平さんの話（1980年6月14日聴取）

おとなしい。人付き合いのいい人だった。兵隊から帰って、ずっと鉱山で働いたんじゃない。閉山のころ、ここ（国東半島の深江）へ来とった。ここへ来たんで長生きもできた。70戸の深江で豆腐屋をやっていたが、昭和8年ごろ、延岡に行った。ベンベルグに出よったが、終戦の年に死んだ。やせていた。

甲斐ミサエさんの話（1980年6月17日）

体が悪かったので、ベンベルグの雑役に出ていた。私が甲斐のところへ嫁に来て、「きつい、きつい、のさん」と言うもので、父（百熊）は手伝いに来てくれた。吾田橋の角、カスガカン通りに父は住んでいて、自転車で20分くらいのところ。ここ（延岡市尾崎町）に疎開していた戦時中、（昭和20年8月5日）延岡が空襲で焼かれた。飛行機はしょっちゅう来たが、空襲で焼かれたのは1回だけ。そのとき、体がきついもので、みんな防空壕に避難するのに、「わしは行かん」と言って、一人残りよった。「あんたを置いて行くくらいなら行かんわ」と言うてから、庭に座って一晩明かしたこともあるんですよ。

咳が出よった。最後は、私が腹膜炎の病気でよう行かんかったので、詳しくは知らない。人から好かれるタイプ。延岡の今山に寄せ墓している。

71-3 佐藤シマノさん

明治27年1月19日、佐藤ヨ子の子女として生まれた

昭和25年10月30日死亡

富高暁さん（百熊さんの甥）、富高ユキキさんの話（1979年11月5日聴取）

喜右衛門さんの嫁のコナさんの妹。畑中のおヨネばあさんの子ども。その妹のセツノさんが国東半島へ嫁に行っちゃった。

甲斐ミサエさんの話（1980年6月17日聴取）

肝臓に膀胱に、なんもかんもひっかぶってしまって、体中悪かった。咳はなかったようにある。最後は肝臓が腫れて、脳にあがって、はたからみると、ずいぶん苦しみよるようにあるが、もう自分では全然わからなかった。「天井板が落ちる」とおらんだり、だいたい苦しんだ。胸まで腫れてしまった。

佐藤勝美さんの話（聴取日不明）

大正12年から昭和5年ごろまで、トロッコなどで運搬していた。住んでいたのは、窯から150～200メートルの自宅。ふだん元気だった。死んだのは肝硬変だったと思う。

7 1 - 4 佐藤勝美さん

北方町八峡在住、九電料金徴収員

明治 45 年 5 月 20 日生。昭和 47 年 12 月 1 日死亡（肝臓がん）

佐藤勝美さんの話（1972 年 2 月聴取）

百熊の長男として生まれ、大正 15 年学校卒業まで鉾山周辺に住んだ。そのあと離村、臼杵で指物大工として奉公。その 2, 3 年後に両親を大分・国東へ呼んだ。昭和 7 年に土呂久に帰った。そのとき 20 歳だった。一晚だけ喜右衛門屋敷に泊まった。喜右衛門は動けないくらいだった。今いっせん息のようになるとですよ。人の肌でなかった。イボガエルの背中のような色で、黒みかかって。家族みんながほとんどそんな色で。喜右衛門はその年に亡くなった、という話を聞いた。

田は家の前に少し（2〜3 反）あった。植えてあったようだが……。近くの草木はほとんど枯れていた。風向きによっては、窯から 150 メートルしか離れていないので、斜め上になるから、ご飯食べる時臭かった。喜右衛門一家は亜砒を焼いていた人と同じ肌の色。亜ヒにやられたのは間違いない。そのころ、仕事にたずさわる者は、「亜ヒ酸をあたると長生きせんぞ」。カエルの口を開けて食わせると、何分もたらずに死んでいった。

喜右衛門のあとを丸岡という人（イセノの夫利三郎の姉妹の主人）が引き受けた。

佐藤勝美の妻晴さんの話（聴取日不明）

勝美は死ぬまで「喜右衛門一家の墓をなんとしてでも建ててやらねば、誰もする者がおらんようになる」と言いよった。

肝臓がんで死んだ。「解剖させてくれ」と県立延岡病院で言われたが、断った。

富松丈平さん（シマノの妹セツノの夫）の話（1980 年 6 月 14 日聴取）

佐伯から行った人が土呂久におったとよな。そうそう、野村さんが懇意だったので、その世話で、勝美が佐伯に指物大工に来た。野村の紹介で指物屋になった。そのあと東京に 2 年くらいおった。

勝美は、初め晴さんを嫁にもらうことになって、わしが仲人で行った。ところが縁がなくて、嫁に来んじやった。来んもんはしょうがねえ。それで、（高見）保つあんの妹を嫁にもろちよった。子どもが 2 人できたあと死んだ。晴さんも縁についちよったが、離婚した。それでまた、勝美と晴さんがいっしょになった。

（北方町）八峡やかいに戻ってからは、電気屋をしよった。晴さんが集金。

7 1 - 5 甲斐ミサエさん

大正 6 年 5 月 25 日	百熊・シマノの長女に生まれる
大正 13 年 4 月	小学校入学
昭和 4 年 4 月	小学校 6 年
昭和 5 年 4 月	高等小学校入学
昭和 7 年 3 月	高等小学校卒業
昭和 7 年 4 月	裁縫学校入学（2 年間）
昭和 9 年 4 月	旭化成入社

甲斐ミサエさんの話（1980 年 6 月 17 日聴取）

百熊は深江に住むつもりで行った。私のいとこがベンベルグにおいて、「ベンベルグに行け」と言われて、「あんな会社好きでないけどなー」と思いながら出てきた。百熊たちも、それからしばらくたって延岡に出てきた。

あの当時、国東は観光地でなかったし、寺とかへ行ったことはない。両子山に登ったことはある。選手になって、宇佐神宮へ行き、走ったことがある。ほかに私は、神社参りなんかしたことない。

私は国東半島は第二の故郷と威張るんですよ。海が好きで。

診断書

病名 高血圧症、慢性気管支炎

9 月 18 日より 12 月 17 日まで休養を要する

上記の通り診断する

昭和 56 年 9 月 21 日

内科医院 医師 印

土呂久訴訟 2 陣一審判決書（第 3 分冊）より

八 佐藤ミサエ（大正 6 年 5 月 25 日生）

III 当裁判所の認定

3 健康被害

（一）公害認定及び症状（発症、経過、現症）

原告らの主張の通り

*原告らの主張は、柳楽翼診断と堀田宣之診断にもとづいて、次の慢性砒素中毒症状があったとした。皮膚障害、慢性胃腸障害、慢性呼吸器障害、鼻粘膜障害、嗅覚障害、聴力障害（内耳性難聴）。

（二）因果関係

ミサエの（一）認定の各症状は慢性砒素中毒によるものであり、かつ、それは土呂久鉦山から排出された砒素に起因するものであると認めることができる。

7 1 - 6 国東半島の深江（現・大分県国東市国東町深江）

富松丈平さんの話（1980年6月14日聴取）

ミサエが尋常小学校6年のとき、土呂久から深江に来た。ミサエは富来（とみく）尋常小学校を卒業した。

鉾山が休山して仕事がなかったから、深江に働くことはないか、とシマノの妹セツノを頼って来た。もうひとつ、家庭の事情もあったが……、頼って来たらん家庭の事情が。

ミサエが高等小学校出て、1年間（ミサエは2年間といった）山下裁縫学校に行った。そして、旭化成ペンベルグにはいった。ミサエが延岡に行って、2、3か月あとに百熊とシマノも延岡に行った。

*百熊が深江にいたのは、昭和4年から9年までの5年間だろう。

勝美は佐伯で指物大工をしていたが、深江には来なかった。佐伯をでてから東京に2年くらいおった。北方町の八峡に帰って電気屋をした。晴さん（再婚）が集金。

百熊さんに「ここにおんなさい」ち勧めた。百熊さんは、この屋敷こうて、深江に住むつもりだったが、わしは道路端におったから。ところが高見保つあんが三ヶ村から延岡に出てきて、「来い」と引っ張った。シマノは「ここにおりてえ」ち言うたけど、1人姉が延岡に出て、近所に家もあるわ……。百兄さんが延岡に行ってから、わしがこの家を譲り受けた。一家は豆腐屋。深江で1軒だけ豆腐をつくって売っていた。

佐藤晴さんの話（聴取日不明）

昭和19年に勝美と結婚して、ずっと百熊夫婦といっしょだった。

昭和5、6年ごろ土呂久を離れて、母（シマノ）の妹（セツノ）がいた東国東の深江という漁港に行った。ここで豆腐屋をした。叔父が富松丈平、その息子は司といいます。

甲斐ミサエさんの話（聴取日不明）

伯母（セツノ）は働きに出ていて、前に1度結婚に失敗して土呂久を出て、どこかで富松丈平と知り合いになったんだろう。むこうでは豆腐屋をやっていた。

深江を訪ねて（1980年6月14日）

70戸の集落。海岸に漁港、といっても入り江にそそぐ小さな川の河口に小舟が10数隻繫留してあるだけ。奥へ、川をはさんで平地が開け、豊かな実りをつけていた。河口は、カキの腐ったようなヘドロの臭い。ちょうど引き潮で、船底がみな水の上に見える。潮風、松林、土呂久からこの漁村へ、なんと新鮮に映ったことか。

7 1 - 7 鉾山師の鉾石さがし

富高暁さんの話（1979年11月5日聴取）

わしが子供のころ、亜ヒ酸が始まる前、アケビとりに行きよったら、何人か、お椀を持って何かしよる。「何しよるじゃろか」とのぞいたところ、すり鉢みたいなので調べよった。金の小さい臼みたいなのの中に、鉾石の粗いとを入れて、しこ木みたいな金の棒で突いて粉にする。そして水を入れて洗う。金の悪いところは水で洗われて流れてしまう。そして、金はなんぼ、銀はなんぼと揺り分けて。鉾山師が何人かで、2番坑の上は昔掘った穴ばっかしですもんね。坑内から掘った土を調べよった。次々と訪ねてきたら、喜右衛門は、ここに錫がなんぼ、なんぼと売り込んで、資金がつづかんでやめたのが、なんぼでもおった。